

「幸せ」が生まれるとき

茨城県 下館南中学校 2年 高崎 友萌

「テーマ、『リクルートスーツ』でお送りしております。」

ラジオから男性の声が聞こえてきます。祖母が内職をしながら聞いているのです。姉と私は春休みで、祖母を手伝っていました。

『一月ほど前のことです。電車で、リクルートスーツを着た女の子と乗り合わせました。大学生でしょうか、スーツを着ていなければ、高校生かと思うくらい、かわいらしいタイプの子でした。——中略——車内を転がっているコーヒの空き缶を拾い、また席に座りました。そして、〇〇駅に着くと、その缶を持ってすうっと降りていったのです。その自然な動きに、私は、彼女の優しさを感じ、心が温かくなりました。』

「空き缶が転がるのって、気になるのに、見て見ぬふりをしてしまいがちですよ。」

「そうですね。ごみを拾って捨てる。そういうことをさりげなくできる人って、すてきですよ。会ってみたいくなっちゃいますね。」

姉が、あわててスマートフォンを持ってきて、急いでメールを打ち始めました。

「お姉ちゃん、何やってるの。」

「ちょっと待って。これ、私なの。」

私と祖母は目を合わせ、それから二人でラジオをじいっと見て、そして姉の方を見ました。メールが読まれたのは、数分後のことです。

『20代の女子大生です。祖母とラジオを聞いています。先ほどの、電車内で空き缶を拾ったリクルートスーツの学生の話、自分のことだと思いメールしました。褒められたくてしたことではありませんが、見て、覚えていてくださる方がいることを知り、とても嬉しくなりました。』

「驚きましたね。つながるものですね。」

「そうですね。私たちも嬉しいですよ。日常のなにげないしぐさが心を動かし、この番組で心と心がつながっていくんですから。」

「ラジオで、やさしさも広がっていくんですね。」

その声は、少し興奮しているような声でした。

姉は、何もなかったように手伝いの続きをしています。祖母は、しわが伸びるんじゃないかと思うくらい顔に力が入り、まだ、目をまん丸にしています。その様子がおもしろくて、私は、声を出して笑ってしまいました。

「お姉ちゃん、すごいね。」

と私が言うと、姉はやさしい笑顔で私を見て、

「そんなことないよ。」と言いました。

「友ちゃん。お姉ちゃんは当たり前のことをしてただけ。ちっとも偉くないんだよ。すごいのは、それを見てくれた人。ラジオの番組にメールを送ってくれた人だよ。」

姉は、その人のおかげで、たくさんの幸せが生まれたことを感謝していました。そして、その幸せを運んでくれたラジオ番組の方々にも、お礼のメッセージを送りました。

私は、(お姉ちゃんはやっぱりすごいなあ)と思いました。そして、私も小さな幸せをみつけて、いっぱい感謝したいと思いました。